

雨ぼけ

泉鏡花

青空文庫

あちこちに、然るべき門は見えるが、それも場末で、古土塀、やぶれ垣の、入曲つて長く続く屋敷町を、雨もよひの陰気な暮方、その県の令に事ふる相応の支那の官人が一人、従者を従へて通り懸つた。知音の法筵に列するためであつた。

……来かゝる途中に、大川が一筋流れる……其の下流のひよろ／＼とした——馬輿のもう通じない——細橋を渡り果てる頃、暮六つの鐘がゴーンと鳴つた。遠山の形が夕靄とともに近づいて、麓の影に暗く住む伏家の数々、小商する店には、早や侘しい灯が点れたが、此の小路にかゝると、樹立に深く、壁に潜んで、一燈の影も漏れずに寂しい。

前途を朦朧として過るものが見える。青牛に乗つて行く。……

小形の牛だと言ふから、近頃青島から渡来して荷車を曳いて働くのを、山の手でよく見掛ける、あの若僧ぐらゐるのだと思へば可い。……荷鞍にどろんとした桶の、一抱ほどなのをつけて居る。……大なる雨笠を、ずぼりとした合羽着た肩の、両方かくれるばかり深く被つて、後向きにしよんぼりと濡れたやうに目前を行く。……とき／＼、

「とう、とう、とう／＼。」

と、間あいだを置いては、低く口の裡うちつぶやで呶うなづくが如くに呼んで行く。

私は此これを読んで、いきなり唐土もろこしの豆腐屋とうふやだと早合点はやがてんをした。……処ところが然そうでない。

「とう、とう、とうく。」

呼よびこえ声から、風体なり、恰好かつこう、紛れもない油屋あぶらやで、あの揚あげものの油を売るのださうである。

「とう、とう、とうく。」

穴あなから泡あわを吹くやうな声が、却かえつて、裏田圃うらたんぼへ抜けて変に響いた。

「こらく、片寄かたよれ。え、退どけく。」

威張いばる事にかけては、これが本場の支那しなの官人である。従者かたが式しの如しかく叱しかり退のけた。

「とう、とう、とうく。」

「やい、これ。——殿様のお通りだぞ。……」

笠かささへ振ふりむ向けもしなければ、青牛せいぎゆうがまたうら枯草がれくさを踏む音も立てないで、のそりと歩む。

「とう、とう、とうく。」

こんな事は前例かっが嘗かてない。勃然ぼつぜんとしていきり立つた従者かたが、づかく石垣いしがきを横よこに擦す

つて、脇鞍わきぐらに踏張ふんばつて、

「不埒ふらちものめ。下郎げろう。」

と怒鳴どなつて、仰あおぎづきに張はり肱ひじでドンと突いた。突いたが、鞍の上を及および、腰こしだから、力が足りない。荒く触つたと言ふばかりで、その身体からだが揺れたとも見えないのに、ぼんと笠かさぐるみ油あぶら売ろうりの首くびが落ちて、落葉おちばの上へ、ばさりと仰あおむ向けに転まげたのである。

「やあ、」とは言つたが、無礼討御免ぶれいうちごめんのお国柄くにがら、それに何、たかが油売の首くびなんぞ、ものの数かずともしないのであつた。が、主従しゆうじゆうともに一いっ驚きつを吃きつしたのは、其の首くびのないう胴どう軀くろが、一ひと煽あおり鞍あおに煽あおると齊ひとしく、青牛せいぎゆうの脚あしが疾はやく成なつて颯さつと駈かけ出した事ことである。

ころげた首くびの、笠かさと一いっ所しょに、ぱたくと開あく口くちより、眼め球だまをくるくると廻まして見み据すゑて居ゐた官人くわんにんが、此こゝの状さまを睨にらみ据すゑて、

「奇怪きがいぢや、くせもの、それ、見届みとける。」

と前に立たつて追掛おいかけると、ものの一町ちやうとは隔へだたらぬ、石垣いしげんも土塀どべいも、葎むぐらに路みちの曲まがり角かど。突つき当あたりに大おほきな邸やしきがあつた。……其の門内もんないへつツと入いると、真正面まへの玄関げんかんの右みぎ傍わきに、庭園ていゐんに赴おもむき木戸きど際ぎわに、古ふる槐えんじゆの大木たいぼくが棟むねを蔽おほうて茂さかつて居ゐた。枝えだの下したを、首くび

のない軀むくろと牛は、ふと又歩またを緩ゆるく、東海道の松並木まつなみぎを行さまく状をしたが、間あいの宿しゆくの灯ひも見えず、ぼつと煙の如く消えたのであつた。

官人は少時しばし茫然ぼうぜんとして門前もんぜんの霽もやに亘たたず。

「角助かくすけ。」

「はッ。」

「当家は、これ、齋藤道三さいとうどうさんの子孫こそんでもあるかな。」

「はーッ。」

「いやさ、入道にゆうどう道三の一族いちやくでもあらうかと言ふ事ぢや。」

「はッ、へゝい。」

「む、いや、分らずば可よし。……一応しちゆう検べる。——とに角かくいそいで案内をせい。」

しかし故こらに主人しゆじんが立会たちあふほどの事ではない。その邸やしきの三太夫さんだゆうが、やがて鍬くわを提ひげた

爺じいやを従したがへて出て、一同いっとう槐えんじゆの根ねを立たち囲かこんだ。地じの少し窪くぼみのあるあたりを掘ほるのに、一ひ

鍬くわ、二ふた鍬くわ、三みくわ鍬くわまでもなく、がばと崩くづれて五六尺しやく、下に空洞うつつろが開あいたと思へ。

べとりと一面青苔あおごけに成つて、欠釣瓶かけつるべが一具いちぐ、さゝくれ立だつた朽目くちめに、大おく生おえて、

鼠ねずみに黄わうを帯おびた、手に余あるばかりの茸きのこが一本。其その笠かさ既に落おちたり、とあつて、傍わきにも

こそあれと説ふ。——こゝまで読んで、私は又慌てた。化けて角の生えた蛞蝓だと思つた、が、然うでない。大なる蝦蟆が居た。……其の疣一つづゝ堂門の釘かくしの如しと言ふので、巨さのほども思はれる。

蝦蟆即牛矣、菌即其人也。古釣瓶には、その槐の枝葉をしたゞり、幹を絞り、根に灌いで、大樹の津液が、木づたふ雨の如く、片濁りしつゝ半ば澄んで、ひたゝと湛へて居た。油即此であつた。

呆れた人々の、目鼻の、眉とともに動くに似ず、けろりとした蝦蟆が、口で、鷹揚に宙に弧を描いて、

「とう。とう。とうゝ。」

と鳴くにつれて、茸の軸が、ぶるゝと動くと、ぽんと言ふやうに釣瓶の籠が噓をした。同時に霧がむらゝと立つて、空洞を塞ぎ、根を包み、幹を騰り、枝に靡いた、その霧が、忽ち梢から雫となり、門内に降りそゞいで、やがて小路一面の雨と成つたのである。

官人の、真前に飛退いたのは、敢て怯えたのであるまい……衣帯の濡れるのを慎んだためであらう。

さて、三太夫が更めて礼して、送りつつ、木の葉落葉につゝまれた、門際の古井戸

を覗かせた。覗くと、……

「御覧じまし、殿様。……あの輩が仕りまする悪戯と申しては——つい先日も、雑水に此なる井戸を汲ませまするに水は底に深く映りまして、……釣瓶はくるくるとその、まはりまするのに、如何にしても上らうといたしませぬ。希有ぢやと申して、邸内多人数が立出でまして、力を合せて、曳声でぐいと曳きますとな……殿様。ぽかんと上つて、二三人に、はずみで尻餅を搗かせながらに、アハ、と笑うた化ものがござりまする。笑ひ落ちに、すぐに井戸の中へ入り込みまする処を、おのれと、奴めの頭を掴みましたが、帽子だけ抜けて残りましたで、其を、さらしものにしたしみまする気で生垣に引掛けて置きました。その帽子が、此の頃の雨つゞきに、何と御覧じまするやうに、恠の通り。」……

と言つて指して見せたのが、雨に沢を帯びた、猪口茸に似た、ぶくりとした茸であつた。やがて、此が知れると、月余、里、小路に油を買つた、其の油好して、而して価の賤を怪んだ人々が、いや、驚くまい事か、塩よ、楊枝よと大騒動。

然も、生命を傷つけたるものある事なし、と記してある。

私は此の話がすきである。

何うも嘘らしい。……

る、たそがれのしよぼく雨、雨だ。しぐれが目にかぶ。……
が、雨である。雨だ。雨が降る……寂さみしい川の流ながれとともに、山家やまがの里にびしよくと降

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成1 泉鏡花」国書刊行会

1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行

1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行

底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店

1940（昭和15）年発行

初出：「随筆」

1923（大正12）年11月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雨ばけ

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>